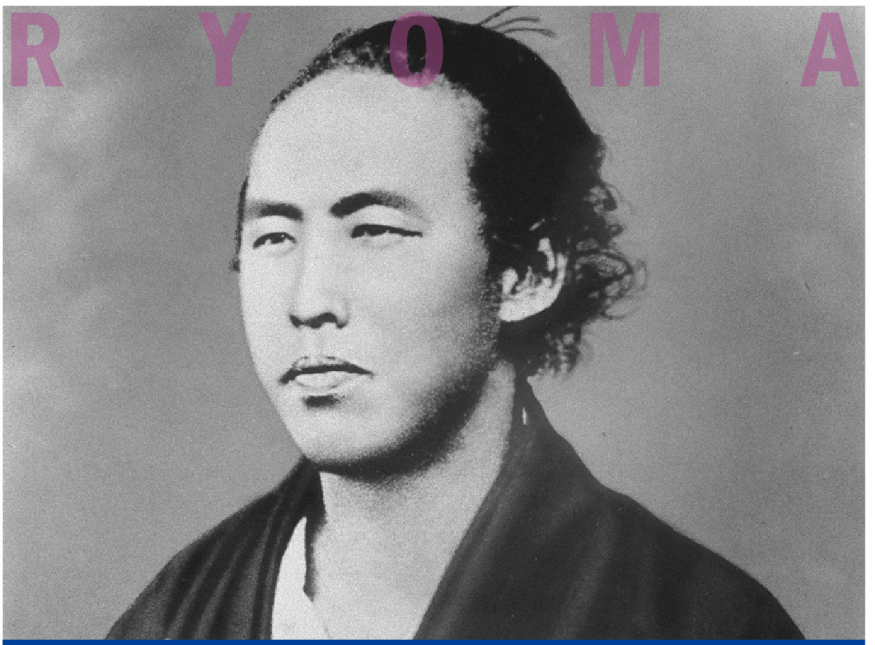

坂本龍馬の人物像概略　vol.2

龍馬は勝海舟の門下生となって幕府の要人と深く関わっている。

文久3年（1863）2月頃　政治総裁職松平春嶽、上洛した前土佐藩主山内容堂を訪ね、龍馬が脱藩罪を追われる身であることを案じ、赦免を要請。容堂はただちに藩庁の者に命じて龍馬の脱藩赦免の手続きをとらせる。

2月25日　龍馬は脱藩赦免され京都河原町の土佐藩邸（現在の京都府京都市中京区木屋町通蛸薬師西南角）で7日間の謹慎処分をうけた。（『維新土佐勤王史』）

3月20日付　姉乙女にあてに近況、勝海舟の門下である事を手紙で報告。「今にてハ日本第一の人物勝憐太郎殿という人にでしになり、日々兼而思付所をせいといたしおり申候」（3月20日付乙女宛龍馬書簡）

4月3日　幕臣大久保一翁より、軍艦奉行勝海舟、松平慶永（春嶽）に宛てた書簡を預かり、9日に幕府軍艦「順動丸」で大坂に入る。翌10日には和歌山滞在中の勝海舟訪問、大久保一翁の親書を渡す。（『海舟日記』）

大久保一翁は幕府存続のため、大政奉還を前提とした諸大名による会議、つまり議会制の導入を早くから訴えるなど、先見の明を持っていた。龍馬にも大いに影響を与えた人物である。

5月16日　海軍塾（勝塾）建設の資金援助を依頼するため、越前福井の松平春嶽の元へ京都から出立する。（『海舟日記』）二回目の福井行き。

20日頃　福井着。初めて横井小楠に会う。小楠は肥後藩士、学識を見込まれ越前藩に招聘されていた。三岡八郎（由利公正）も同席。龍馬は海軍塾建設の資金は千両必要と申し出た。「勝拝借高承り候処（中略）千両程奉願度念願と龍馬申出候」（長谷部甚平、三岡八郎宛横井小楠書簡）

由利公正は、維新後東京府知事や岩倉具視に随行してヨーロッパへ渡航し、板垣退助や江藤新平らと共に政府に対し民撰議院設立建白書の建白書を提出。1894年に京都にて有隣生命保険会社の初代社長に就任した。

6月29日　姉乙女に「日本を今一度せんたくいたし申候」の手紙を書く。倒幕を意味すると思われがちであるが、この時期龍馬には幕府を倒すという構想はなく、あくまでも日本国内での矛盾を一掃し、ひとつにまとまり夷狄（いてき）に対抗出来る日本国をつくるべしという思いであった。

「然に誠になげくべきことはながとの国に軍初り、後月より六度の戦に日本甚利すくなく、あきれはてたる事は、其長州でたゝかいたる船を江戸でしふくいたし又長州でたゝかい申候。是皆姦吏の夷人と内通いたし候ものにて候。右の姦吏などはよほど勢もこれあり、大勢にて候へども、龍馬二三家の大名とやくそくをかたくし、同志をつのり、朝廷より先づ神州をたもつの大本をたて、それより江戸の同志、はたもと大名其余段々と心を合せ、右申所の姦吏を一事に軍いたし打殺、日本を今一度せんたくいたし申候事にいたすべくとの神願にて候。」（6月29日付乙女宛龍馬書簡）

※【姦吏】（カンリ）は、法を枉（ま）げて、私利をはかる悪しき官吏（＝奸吏）。

8月18日　政変が起こり、三条実美ら七卿が、久坂玄瑞ら護衛の兵と共に長州へ下る（七卿落ち）。京都における尊攘派は衰退。公武合体派が勢力を回復。

文久3年の後半は勝海舟の門下生として京都、江戸を度々往来する。

翌元治元年（1864）2月　勝海舟とともに長崎へ行き5月京都にもどる。

5月頃　龍馬（30歳）は、中岡慎太郎・元山七郎・望月亀弥太・千屋寅之助・池内蔵太・安岡金馬・山本甚馬・吉井玄番たちと、大仏南門前今熊の道「河原屋五兵衛」の隠居所を借りに隠れ住んでいた。その留守と賄いはお龍の母貞がしていた。お龍（24歳）は近くの七条新地の旅館「扇岩」に手伝い方々預けられていた。そこで龍馬とお龍は出会うことになる。（慶応元年9月9日付乙女・おやべ宛龍馬書簡）（『反魂香』）

6月1日　翌日江戸へ向かうことになっている龍馬は京都七条新地の「宿屋扇岩」にお龍を訪ね、別盃する。その夜、菅野覚兵衛、望月亀弥太を誘い思い思いの扮装をして祇園一力で豪遊する。（『反魂香』『千里駒後日譚』）

8月1日　京都へもどってきた龍馬は青蓮院塔頭金蔵寺（現在廃寺）の住職智息院の媒酌でお龍と内祝言をあげた。その後お龍を、伏見寺田屋に預け自身は東奔西走することになる。